2005年　卒業研究要旨

若者の自立と親子関係に関する研究

朝倉　一樹

近代以前ならば、若者は青年期のうちに大人になる準備をし、成人期を迎え自立を達成していた。しかし、社会構造の変化により、若者の意識や彼らのおかれる環境にも変化がおきた。そして現代の日本社会においては、学卒後も自立することなく、親に依存を続ける若者が増えている。自立しない若者は、少子高齢化、晩婚化、未婚化、さらには経済不況など、さまざまな社会問題を引き起こす要因のひとつになっている。

なぜ若者は自立しない、または、できないのだろうか。若者が自立しないことには、社会的要因はもとより、家庭環境、特に親子関係にも原因があるのではないか。そもそも、依存を続ける子どもは、依存させ続ける親の存在なくしてはありえないように思う。なぜ親は子どもを援助し続けるのだろうか。

そこで私は卒業論文において、若者の親子関係に着眼し、現代の自立しない若者と依存をさせる親子の実態を明らかにするとともに、それらの形成要因について論じた。

第１章では、文献調査と既存のデータを基にして、親に依存する若者の親子関係の諸相と、それを取り巻く社会について考察した。

高学歴化により、若者の自立が遅れることとなり、学生たちは親からの経済的援助を受け豊かな生活を享受している。親の経済力に支えられた豊かな生活に慣れてしまった彼らは、学卒後も自立しようとしない傾向を強めている。また、学卒後の若者は、青年期とも成人期ともいえない「ポスト青年期」といわれる新しいライフステージに区分されるようになった。このことは、若者のライフサイクルを多様化することとなったのである。そして、彼らの中にはパラサイト・シングルとよばれる基礎的生活条件を親に依存する未婚者が増加した。

自立しない若者の増加の背景には、援助を惜しまない親たちの存在がある。戦後、「子どものため」イデオロギーの普及によって、子どものために尽くすことをアイデンティティとする親が増加した。また、中年期にあたる若者の親世代は、年功序列制度に支えられた豊かな経済力をもっている。この、子どものために尽くす意識とそれを可能にする経済力によって、親は長期にわたって子どもを援助し続けることになるのである。

自立しない若者は、親との同居に高い満足度を示している。だが、親に依存をしたままの状態を好ましいと思っているわけではない。自立しなければ、結婚もできないし、親がいつかは、いなくなることも分かっている。しかし自立したことによって、それまで続けてきた豊かな生活ができなくなることを恐れるとともに、不安定化した現代社会を懸念し、現状のまま親に依存し続け「自立しない」ことを選んでいるのである。

このような親に依存する若者が、どれくらい存在するのだろうか。第２章では、筆者が行ったアンケート調査を基に大学生の親子関係と自立意識について分析した。

調査から明らかになったことは、学生のほとんどが、授業料と生活費を親に依存していることであったそして、学生たちは、アルバイトで稼いだお金を、親の負担軽減のためではなく、趣味や交遊費として豊かな生活をおくっていることがわかった。ただし、平均的な生活費以下の仕送りしか受けていない一人暮らしの学生や、小遣いをもらっていない自宅生といった比較的自立度の高い人も存在し、アルバイト収入や、将来自分で返還する奨学金などで生活費を負担しているのである。

「子どものために尽くす親」の存在は少数だったが、親からの経済的援助は、学生がアルバイトをするという経済的自立への一歩を妨げる傾向があり、子どもを依存させようとする親は少ないが、親の援助が結果的に若者を自立から遠ざけるということがあるとうかがえる。「自立は本人の意志によってなされる」また、「親元を離れたほうが自立できる」と考える学生が多く存在した。しかし、それに比べ、「卒業後は親元を離れて暮らしたい」と考える人の割合は少なくなっており、「自立しない」若者の兆候があり、若者の自立達成の一番の要因が本人の自立意識であるということがうかがえた。

既存のデータと今回の調査結果にはずれがあり、その理由は調査対象が静岡大学の学生のみに限られていたからだと思われる。しかし、第1章で論じた、自立しない若者の親子関係にみられる要素をもっている学生は少なからず存在する。

若者の親への依存は、社会的背景や親の意識などさまざまな要因をもっていて、本人の意志だけで成り立つものではない。若者の自立を支援する社会体制や、親の意識改革が望まれる。だがしかし、自立することにおいて本人の意志というのは最も重要なファクターであり、不安定化する社会の中で若者は「自立する意志」を持つことが必要なのであるのではないだろうか。